Issue No. 4 Oct. 2016

ISOM Japan NEWS Letter

The First Japan-Germany Joint Symposium on Kampo Medicine and Acupuncture

金沢医科大学　元雄 良治

2016 年 4 月 15～17 日に第 18 回国際東洋医学会学術大会（18th ICOM）が、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで開催された。最終的に、市民公開講座を入れて約 600 名の参加者を迎え、学術大会は盛会裏に終了した。

この会議の初日 14:00 より「The First Japan-Germany Joint Symposium on Kampo Medicine and Acupuncture（第 1 回・日独漢方鍼灸シンポジウム）」が開催された。初めての試みであり、参加者同士集中して討議できるようにと、セミクローズドとした。ドイツから 9 名、日本から 18 名の指定討論者が参加した。しかし、当日はオブザーバー席に 50 人を超える聴衆が座り、熱心に聴講していたのが印象的であった。
最初に、小生（元雄）とライセンウェーバー先生(Dr. Heidrun Reissenweber-Hewel)が開会の挨拶を述べた。

総合司会の元雄良治先生

同じくハイトルン・ライセンウェーバー先生

第 1 セッション

前日に発生した熊本地震のため、熊本赤十字病院の加島雅之先生の到着が遅れた。そこで、第 2 セッションであった薬学セッションを最初に持ってきて、シュレーダー先生(Dr. Sven Schoeder)の司会のもと、名古屋市立大学の牧野利明先生が、「漢方薬の原料である生薬の「有効成分」の取扱いについて」というテーマで基調講演を行った。

牧野先生は、生薬における有効成分は、西洋医学的な作用の場合は確定できることは多いが、東洋医学の場合はわからないことのほうが多いと述べ、生薬中の有効成分と指標成分の概念や役割の違いを認識する必要があることを指摘した。そして、東洋医学で利用する生薬については、「有効成分」という用語は使用できず、あくまで品質の確保に使用するための「指標成分」であると認識したほうがよい、という極めて重要な指摘をされた。これは、日本人でも正確に認識している人は少なく、ドイツ側の反応も大きかった。

その後に、キャメロン先生(Dr. Silke Cameron)、クフタ先生(Dr. Kenny Kuchta)、ラウシュ先生（Hans Rausch)の 3 人のコメンテーターが質問と意見を述べた。次に総合討論となった。

第 1 セッションの基調講演をする牧野利明先生

座長のスヴェン・シュレーダー先生

第 2 セッション

第 2 セッションは「漢方医学の構造と特徴」というテーマで、加島雅之先生が基調講演を行った。先生は熊本地震での救急医療のため不眠不休で熊本赤十字病院にて働いたあと、このシンポジウムだけのために沖縄に来た。講演では漢方医学の特徴を、実例を呈示しながら解説された。とくに「方証相対」に関する考察は、漢方医学の構造を見事に説明していた。

特に、日本の漢方医学の特徴である方証相対システムを、ブラックボックスの考え方を導入して、中医学の弁証論治システムと比較しながら説明し、漢方医学には独自の方法論と目的が明確に存在していることを印象深く話された。

司会はハンブレヒト先生（Dr. Klaus Hambrecht)で、単一生薬と複数の生薬の組み合わせである処方との違いに言及した。

第 2 セッションの基調講演をする加島雅之先生

座長のクラウス・ハンブレヒト先生

ラウシュ先生

ライセンウェーバー先生

内田先生

またコストナー先生（Dr. Bernd Kostner)は、実際に現代医学と漢方医学を使い分けるのは難しくないかと質問されたが、加島先生は「自分にとっては左脳と右脳を使うようなもので、全体として考えている」と答えた。総合討論では、一元的医療としての漢方医学の特徴について発言が相次いだ。

コストナー先生（左）エーベルハルト先生（右）

第３セッション

第３セッションは、ヴィット先生（Dr. Claudia Witt)が、「鍼の臨床研究 ― エフィカシーとエフェクテブネスのギャップから、何を学ぶことが出来るか？」というテーマで、鍼の大規模臨床試験に関する基調講演を行い、そのエビデンスに基づく高度な内容は参加者一同に感銘を与えた。司会の山岡傳一郎先生は、日本の鍼灸の歴史も踏まえて総括した。コメンテーターは山下 仁先生と関 隆志先生であった。

第３セッションの基調講演をするクラウディア・ヴィット先生

座長の山岡傳一郎先生

おわりに

第１回ということで、どのような雰囲気になるかわからなかったが、参加者全員が真摯に議論に参加し、時間通りに進行した。医・薬・鍼の３分野において現時点でどのような情報があり、お互いがどのような認識をもっているかが、明らかになり、大変有意義であった。

第１セッションでは、日本の医療用漢方製剤の特徴と、その品質評価の基準をどこにおくのか、という牧野先生の講演は、日本の臨床家には初めて聞く人が多かったであろうが、ドイツ人にとっても大変参考になる内容であったと思われる。指標成分を品質評価のために利用するということが医療用漢方製剤にとって極めて重要であるという牧野先生の意見は、彼らにとって納得のいくものであったようである。

第２セッションでの加島先生の講演は、世界各国の研究者から寄せられる「漢方医学が中医学とどう異なっているのか」という質問に対して、これらを包括する大きな枠組みを設定して、古代中国医学に端を発する伝統医学を理解する方法論を示したという点で、画期的であった。

第３セッションのヴィット先生の講演は、伝統医学（特に鍼灸）が、エフィカシーとエフェクティヴネス（有効性と臨床的有用性）に関して、どのようなスタンスで臨む必要があるかということを示した。ドイツでは医師が鍼治療を実践するので、日本の臨床医に比べて鍼治療に対する関心度が格段に違う。日本の鍼灸界の今後の進むべき方向について大きな示唆を与えた講演であった。

閉会の辞はライセンウェーバー先生と小生が行い、4 時間のシンポジウムは定刻 18:00 に終了した。

コメンテーターとして参加して

森ノ宮医療大学鍼灸情報センター
山下　仁

生薬セッション、漢方医学セッションに続いて、鍼灸セッションが設けられました。愛媛県立中央病院漢方内科の山岡傳一郎先生が座長を務め、チューリッヒ大学補完統合医療研究所教授の Claudia Witt 先生が鍼の臨床研究における有効性（efficacy）と有用性（effectiveness）のギャップについて講演されました。

Witt 氏は彼女自身が主導したドイツにおける大規模な鍼の臨床試験の結果を紹介したうえで、臨床試験はバイアスを排除するためになるべく均等な患者を集めて鍼刺激や経穴の特異的効果に注目して実施されるが、ここで得られる結果と現実の臨床で扱う患者や選択する鍼治療法とには大きな隔たりがあることを指摘しました。そのようなギャップを埋めるために近年では、日常的に行われている治療法（薬物療法など）と鍼治療を比較するといった現実レベルの有用性に注目して研究を進めているとのことでした。

この講演に対して東北大学大学院の関隆志先生と私（山下）が指定発言をいたしました。私からは、まず、ドイツで行われた臨床試験において偽鍼として用いられた刺激法が日本では様々な形の「本物」の鍼治療として臨床で実践されていることを説明しました。すなわち小児鍼、円皮鍼、鍉鍼、切皮刺激、阿是穴刺鍼などです。次に、得気への感受性や鍼灸への信頼度は国民によって大きく違い、それが臨床効果に違いをもたらす可能性について先行研究データにもとづき解説いたしました。

クフタ先生とキャメロン先生

山下先生

関先生

ハンブレヒト先生

シュレーダー先生

ISOM Japan ニューズレター 2016 No. 4
発行日 2016 年 10 月 5 日
編集者 ニューズレター編集委員会
発行者 安井廣迪
発行所 国際東洋医学会日本支部（ISOM Japan）

国際東洋医学会日本支部
ISOM Japan
名古屋市瑞穂区田辺通３－１
名古屋市立大学薬学部生薬学分野内
TEL&FAX　052-836-3416
Email: icom-japan@phar.nagoya-cu.ac.jp
ウェブサイト http://isomjpn.umin.jp/